

本文献紹介に示された見解は、航空自衛隊幹部学校航空研究センターにおける研究の一環として発表する執筆者個人のものであり、防衛省または航空自衛隊の見解を表すものではありません。

2021年5月26日

文献紹介 016

「海軍 2 名飛行員成功処置一起戦機発動機空中 停車特情」

～人民解放軍海軍航空兵の実戦的訓練と飛行安全について～
『海軍新聞』2021年5月1日

防衛戦略研究室 相田 守輝

2021年4月30日、中国人民解放軍海軍航空兵（People's Liberation Army Navy Air Force : PLANAF）の航空大学校にて、飛行安全に係わる褒章セレモニーが行われた。本稿では、PLANAFの機関新聞である『海軍新聞』に2021年5月1日付で掲載された関連記事を中心に紹介し、注目すべき論点について提示することとしたい。

1 中国国内の報道内容

(1) 海軍新聞「海軍 2 名飛行員成功処置一起戦機発動機空中停車特情」¹

4月上旬、海軍航空大学某訓練団による夜間編隊飛行訓練の際に、教官パイロットの易小偉（Yì Xiǎowěi）と学生パイロットの徐磊（Xú Lěi）が操縦する双発戦闘機「戦鷲」が、突如として両エンジン停止の事態に見舞われ、2,000メートル（約6,500フィート）の高度で推力を失った（原文：战机 2000 多米的高空失去动力）。

彼らは最良の判断（原文：果断决策）と緻密な操縦（原文：精准操纵）のもと、暗黙のなかでのクルーコーディネート（原文：默契配合）を行い、最

¹ 銭曉虎「海軍 2 名飛行員成功処置一起戦機発動機空中停車特情」『海軍新聞』2021年5月1日、http://www.81.cn/hj/2021-05/01/content_10031091.htm, accessed on May 2, 2021.

終的には高度 500 メートル（約 1,600 フィート）の低高度でエンジンの再始動に成功し（原文：最终在距地面不到 500 米的极限高度成功重启飞机发动机）、戦闘機「戦鷹」を安全に着陸させることができた（原文：并操控战鹰安全降落）。

海軍航空大学のある指揮官は、「このような低高度で両エンジン停止という緊急事態（Emergency）に対し、任務部隊が適切に対処できたことは初めてのことであった（原文“这是任务部队首次在如此低的高度成功处置战机双发空中停车特情）」と語り、見事に生還した教官パイロットに一等功労賞を、基地は学生パイロットに二等功労賞を与えた、という。

（2）補足内容：実戦的訓練

『海軍新聞』は、この緊急事態からの生還という事実に対し、次のように「実戦的訓練」を関連付けながら補足説明している。

すなわち、「PLAN の中で変革が進むなか、近年、（PLANAF の）飛行連隊は「実戦的訓練」を厳しく行っており、絶えず進化を求めてきた。昨年（2020 年）には、全面的に刷新した「新シラバス」をもって飛行訓練を試行し、一般訓練にまでそれを適用し、部隊との密な連携を実現した」という。

さらに『海軍新聞』は、「将兵はみな常に技術と戦術レベルの向上を最優先とし、装備の限界に対して常に挑戦し（原文：不断挑战装备极限性能）、既存の訓練モデルを壊してでも（原文：打破原有训练模式）、積極的に海上での超低空奇襲攻撃（原文：海上超低空突防）、海上艦艇目標への突撃（原文：海上舰艇目标突击）、学生パイロットによる夜間編隊飛行（原文：学员夜间编队飞行）など、実戦的かつ高難度な訓練を推進し、「賢く戦って勝ち、海と空において君臨するような（原文：“善战能赢、叱咤海天”）」海空戦闘員を数多く養成しつづけている」と強調している²。

2 コメント

（1）報道内容から推察できる事実関係とは

上記『海軍新聞』や『解放軍報』などでは、当該部隊の所属などを明らかにしないまま報道する傾向がある。PLA で「戦鷹」とは特定の機種を定めず、戦闘機タイプの通称として使われることも多い。しかしながら、機種

² 銭「海軍 2 名飛行員成功处置一起戦機発動機空中停車特情」

や所属部隊を類推することが可能なケースもある。

すなわち、①海軍航空大学の某訓練団に所属している機種であること、②双発エンジンを搭載した練習機であること、③超低空飛行や夜間における編隊飛行を、学生パイロットに求める教育レベルであることなどを踏まえれば、この「戦鷹」と称される機体は、高級飛行教育課程で使用される高等練習機の JL-9 もしくは、JL-10H の可能性が高い³。

ちなみに新型の JL-10H は、2018 年から PLAN 仕様の高等練習機として、航空工業江西洪都航空工業集団有限責任公司から導入されたばかりの練習機であり、遼寧省（葫蘆島綏中）にある海軍航空大学校訓練団に配備されている⁴。この JL-10H が使用される海軍航空大学校での飛行教育課程とは、PLANAF の実戦部隊へ配属される前の最終関門の飛行教育課程でもあり⁵、JL-10H⁶や JL-9 による飛行教育が、どのように PLANAF のパイロット養成の成否に関与しているのか、注目していく必要もあろう。

³ Xiaoci, Deng, “PLA Navy to streamline pilot training as more aircraft carriers expected,” *Global Times*, January 7, 2018, <https://www.globaltimes.cn/content/1083697.shtml>, accessed on May 20, 2021. JL-10H 高等練習機は、ロシア・ヤクート社製造の Yak-130 と形状も性能も、非常に酷似している。

⁴ 航空工業江西洪都航空工業集団有限責任公司ホームページ、「猎鷹 L15 高級教練機」<http://www.hongdu.com.cn/cpxx.jsp?id=24>, accessed on May 20, 2021. 人民解放軍空軍（People Liberation Army Air Force : PLAAF）仕様の「L-15」として製造設計された。のちに PLAN 仕様や海外輸出用などが製造されている。

⁵ Makichuk, Dave, “First batch of JL-10 cadets show they have the right stuff,” *Asia Times*, July 23, 2020, <https://asiatimes.com/2020/07/chinas-first-batch-of-jl-10-cadets-show-they-have-the-right-stuff/>, accessed on May 20, 2021.

⁶ なお、中国の高等練習機 JL-10H と酷似しているロシアの練習機 Yak-130 は、最近 2021 年 5 月 19 日、ベラルーシにて墜落し、ベラルーシ軍パイロット 2 名が死亡している。Malyasov, Dylan, “Belarus confirms Russian-made Yak-130 jet crashed,” *Defence Blog*, May 19, 2021, <https://defence-blog.com/news/belarus-confirms-russian-made-yak-130-jet-crashed.html>, accessed on May 20, 2021.



写真：江西洪都社が製造する高等練習機「JL-10H」（出典：Makichuk, Dave, “First batch of JL-10 cadets show they have the right stuff,” *Asia Times*, July 23, 2020, <https://asiatimes.com/2020/07/chinas-first-batch-of-jl-10-cadets-show-they-have-the-right-stuff/>, accessed on May 20, 2021.)

（2）報道内容から読み取る PLANAF の状況

改めて「緊急事態の状況」について注目してみよう。この練習機は、夜間飛行訓練中、2,000メートル（約6,500フィート）の高度で両エンジンの推力を喪失した。パイロットは空中再始動を試みるも、最終的には高度500メートル（約1,600フィート）でようやくエンジンの再始動に成功した、という。夜間において大半の電源を喪失してしまう「オール・エレキ・アウト」という事象にパイロットが適切に対処し、生還することの難しさは言うまでもない。しかしながら、上記『海軍新聞』の報道内容が正確ならば、「飛行安全」に関して疑問がないわけではない。

すなわち、両エンジンが停止し滑空状態になりながら、パイロットは高度1600フィートになるまでエンジンの再始動を試みつづけたのであれば、パイロットが脱出すべき決心高度はどのように規定されているのか。飛行指揮の観点から「飛行安全」に対する中国の考え方が垣間見える。

さらに、「実戦的訓練」を強調する記事の論調にも注目してみよう。何故、夜間飛行中に、空中再始動に成功した練習機の事例を「実戦的訓練」と関連

付けて報道しているのだろうか。

2017年4月の海上閱兵式では、空母「遼寧」の甲板上にて習近平（Xi Jinping）中央軍事委員会主席は、PLANに対し「世界一流の海軍」になることを求めた⁷。その一環として、PLANAFは「実戦的訓練」を加速させており、海上における超低空奇襲攻撃や夜間攻撃などを模擬した飛行訓練が、その「実戦的訓練」の代表格として推進されてきた。

一方で、「実戦的訓練」の推進が航空事故を誘発するとの指摘は中国国内でも見られる。一例として2019年3月にPLANAFの戦闘機JH-7が海南島で墜落したほか、2016年以降、空母艦載機J-15が少なくとも3回の航空事故を起こしているように、「実戦的訓練」の加速と同時に航空事故が多発していることから、因果関係が疑われる⁸。

上記報道のような「実戦的訓練」実施を含めた「新シラバス」は、どのような作戦様相（Operational Concept）に基づいて作成されたのだろうか。この点について、PLANAFがどのような実戦的訓練を行っているのか、航空事故の状況を含めて引き続き注目していく必要がある。

ともあれ、「新シラバス」を短期間のうちに作成し、部隊へ適用させている事実には驚かされてしまう。この「新シラバス」については内容もさることながら、業務処理の驚異的な速さも注目すべきポイントである。

⁷ 王士彬「深入貫徹新時代黨的強軍思想把人民海軍全面達成世界一流海軍」『当代海軍』2017年4月、人民海軍報社、7-11頁。

⁸ Liu, Zhen, “Two dead after Chinese navy plane crashes,” *South China Morning Post*, March 19, 2019.